



【紅梅】絵・文：白澤 恵舟

梅の花が咲くころは、空気にびりつとしたものが残っていて、緊張感が心地よい。今年も無事で梅見ができた幸せを、からだ一杯に吸い込み、胸を大きく膨らませてみた。

社協会長退任

会長 菅原 三朗

平成十七年三月、旧天王・昭和・飯田川三町の合併により、新たに設立された「潟上市社会福祉協議会」の会長に就任しましたが、この度二期目の任期満了により退任いたしました。

昭和六十年代、市町村社協の会長は殆どが首長でありましたが、社会福祉事業法では社会福祉協議会は、民間の自主的な団体であると規定されているので、社協活動のより活発化のためには是非とも民間の会長がのぞましいといわれ、昭和六十二年に旧昭和町の社協会長に就任しましたが以来今日迄二十二年間、地域の様々な福祉の移り変わりと共に歩んで参りました。

子供が肢体不自由児であった関係から、障害児者の教育（治療・訓練・教育・進路）等の充実向上のため、関係団体等にも関わりながら活動もして参りました。

昭和三十年代に脊髄性小児マヒ

（ポリオ）が全国的に大発生し、そのための治療施設として本県でも昭和三十四年、秋田県太平洋療育園が開設をされております。ポリオはその後完全に予防されるようになり、代わって脳性小児マヒなど障害の重い子供も次第に療育を受けられるようになり、昭和四十五年には「心身障害者対策基本法」が制定され、更に昭和五十四年には「養護学校教育義務制」の実施、そして昭和五十六年には「完全参加と平等」をスローガンに国際障害者年を迎え翌五十七年から、障害者の十年が始まり様々な事業が展開されて参りました。

一方昭和四十五年に六十五歳以上の高齢者が人口の七%を超え、国連が定義する高齢化社会に突入をしました。それより先の昭和三十八年には「老人福祉法」が制定されておりますが、その後高齢化は急速に進み社会福祉は老人福祉一色となり、福祉といえばイコール老人福祉の様相となったが、平成元年には高齢者保健福祉推進十ヶ年戦略（ゴールドプラン）が策定され、寝たきり老人ゼロ作戦など総合的な対策が確立されていきました。又平成二年には「福

祉八法」の改正が行われ、市町村主体型の地域福祉・在宅福祉へと進んでいき、住民の福祉はその住んでいる市町村が全責任を負うことになり、超高齢社会の到来する中で平成十二年四月には「介護保険制度」が実施をされております。

障害児者の態様は益々重度多様化しておりますが、平成十八年には「障害者自立支援法」も制定され、障害者が地域で暮らすことがあたりまえである、をキャッチフレーズにしております。

障害者や高齢者を地域から隔離することなく、地域で共に生きていく社会をつくるという、地域福祉の理念を達成し「ノーマライゼーション」の考え方を具現化していくためには、地域住民総参加のボランティア活動を推進していくことが最も大切であります。

社協はその先頭に立って行政と住民のパートナーシップづくりを進めるとともに、共に生きる、ふれあいのまちづくりのための福祉の土壌作りと、今県社協が進めております「地域福祉トータルケア推進事業」に参加し一体となって邁進していかなくてはならないと思います。

「どうなる日本！—政治・経済ここがポイント—」

2009新春講演会

2月24日、(社)秋田県建設業協会、秋田県建設産業団体連合会、秋田県建設青年協議会の共催による2009新春講演会が秋田ビューホテルにて開催され、会員関係者100名余りが参加。

講師に本県出身の橋本五郎氏(読売新聞特別編集委員)を招き、「どうなる日本！—政治・経済ここがポイント—」と題し講演が行われ、政治・経済の話題をはじめ、現在地方が置かれている状況などに対する多面的な分析・解説に参加者が耳を傾けた。



橋本氏は講演の冒頭、今の政治の状況を「政治家が自分の配役がわからない、シナリオが無い中で政治が動いている」と述べ、将来の予測が立たない状況であっても何が大事であるかは話していかなければならないと訴え、道路などの後に残す資産としての議論の必要性を述べた。

経済については昨今の非常事態に触れ、金融商品が国家より強い力を持ち、危機の広がりも誰もわからない世界であることから企業資本主義の現状に疑問を呈すると共に、「我々の世界は足下が揺らいでいる」と現状の不安定さを強調。

地方についての話題では、自治体の予算不足による社会資本整備の停滞、県・市町村単位での過疎化、そして、出身地で一人暮らしをしていた自身の母親とのエピソードから独居老人の問題等を提起。働く場所が無いことから

子供が地元に残れない、他県から戻れず親と一緒に暮らせないという背景が生む独居老人の孤独の深さは地方の人間でないと理解できないと述べた。

また、秋田の財産は子供であること述べ、先の全国学力テストの結果を含め、生活習慣、教育体制など本県における子供を取り巻く環境の良さを賞賛した。

橋本五郎氏は1946年 琴丘町(現・三種町)生まれ。1970年 慶應義塾大学を卒業後、読売新聞社へ入社。政治記者を務め、論説委員、政治部長、編集局次長を歴任、2006年12月より特別編集委員を務める。



県協会

人材確保・育成協議会を開催

推進方針、実施計画などを承認

県協会では、平成21年2月19日(木)秋田ビューホテルにおいて、平成20年度秋田県建設産業人材確保・育成推進協議会(会長・川上洵秋田大学工学資源学部教授)を開催した。協議会には、業界や行政機関、教育機関の代表者などを含めた14名が出席。初めに、人材確保・育成推進協議会川上会長は、「平成20年度の倒産件数は建設業が全体の27%を占めている。地方の有力企業の倒産をはじめ公共事業の予算縮小、リーマンブラザーズの破たんにより100年に一度の最悪な状況となっており、雇用の悪化、特に建設産業が厳しい中、秋以降の新規採用の内定の一部取り消し等があり、これは次年度まで響いてくるようだ。このような現状の中、今日は建設人材確保に係る現状報告、短期的長期的な今後の取組について各方面からのご意見をいただきたい。」とあいさつ。

引き続き協議事項に入り、20年度新規学卒者採用状況や21年度4月新規

学卒者採用内定(予定)調査結果、20年度の雇用改善推進事業活動状況が報告された。また、21年度雇用改善推進事業実施計画が事務局より説明され、インターンシップを円滑に行うための仕組みについての案が事務局より示された他、新規事業として県内の建設系高校の生徒を対象とした建設系高校生特別教育(資格取得)推進モデル事業(仮称)の実施について検討された。さらに、行政側から平成23・24年度建設工事入札参加資格審査において新規学卒者を含む若年者を採用し、かつ継続雇用している者を地域雇用の創出に貢献している企業として加点対象となり、また、インターンシップの受入企業についても加点対象となることがアナウンスされた。

委員からは、「新卒者を採用して教



育する体力が今の企業にはない。企業に力を与えられる環境にして欲しい。」「今の経営状況では人材確保、能力開発は困難。新規採用もインターンシップも受ける側が大変だとすれば声を大にして基本的な社会構造をテコ入れすべきだ。」「インターンシップについては地域により温度差がある。温度差を解消してほしい。」「新規事業については学校側ですすでに有料で実施している。今までの企業との兼ね合いもあり検討の余地がある。」等の意見がだされ、事務局では新規事業については各高校へアンケートを行うとともに、関係者に理解を求める方向で更に検討していくこととした。

情報コラム Vol.27

建設業と地域の元気回復事業

建設業の複業化などを通じた
地域活性化への支援を強化

このたび、国土交通省から地域活性化につながるようなプロジェクトの立ち上げや試行的実施などに補助金を交付して実現を後押しする施策が示されました。応募は、建設業団体や地方自治体、異業種団体などで構成する協議会から受け付けることとなっております。

1. 趣旨

地域の建設業は、地域経済や雇用のそれぞれ約1割を担う基幹産業であるが、建設投資の減少、価格競争の激化、景気の悪化等、地域の建設業を取り巻く経営環境はかつてない厳しい状況となっているとともに、地域経済も厳しい状況となっている。

こうした状況の中、建設業の保有する人材、機材やノウハウ等を活用し農業、林業、福祉、環境、観光等の異業種との連携等により、地域づくりの担い手である建設業の活力の再生、雇用の維持・拡大や地域の活性化を図ることが求められている。

このため、地域における問題意識を共有した上で、建設業団体や地方公共団体など地域関係者が協議会を構成し、地域の合意形成等を促進しながら、異業種との連携等による地域活性化に資する事業の立ち上げを支援する。

2. 事業実施主体

建設業団体、地方公共団体等からなる協議会
(事業管理者は、都道府県、市町村又は、法人格を有する建設業団体)

3. 支援内容

・事業実施主体である協議会が行う検討、計画策定、人材育成、広報、連携事業の試行的実施等の活動全般

4. 交付率

定額 (上限は2500万円の予定)

5. 事業実施期間

平成21年度から平成22年度まで

6. 平成20年度補正予算額

35億円

※本会ホームページでは上記に関する国土交通省からの提供情報を掲載しておりますので併せてご覧下さい。

土木 建築の

近代化 遺産

No.77 (最終回)

小坂鉄道・小坂駅

鹿角郡小坂町小坂鉱山字古川



明治四十二年(一九〇九)、小坂鉱山専用鉄道を譲り受けた小坂鉄道株式会社に於て旅客営業が始まった。小坂鉄道は旅客や鉱物、木材を輸送したばかりでなく、外部からの新鮮な文化の架け橋にもなった。昭和三十二年(一九五七)同社は同和鉱業(株)に吸収合併され、同三十七年には線路幅が七六二mmから国鉄(のちのJR)と同じ一〇六七mmに拡大し、貨車の直通運転もできるようになった。



平成六年(一九九四)経営を立て直しを図る鉱山の合理化によって、客車部門の廃止が決定。八五年に及ぶ旅客営業の歴史を閉じた。さらにその後、平成二〇年に貨物輸送のみだった小坂線の全面的な事業休止が決定した。小坂駅の駅舎が古い名残を伝え残しているが、小坂町郷土館の敷地内に同じ駅舎が復元保存されている。建物は、木造、(ともに県有形文化財)なども保存展示されている。

平屋建、和小屋、切妻造、鉄板葺、約四六坪の面積である。郷土館に復元された駅舎の外に、大正五年(一九一六)に二、三等客車として造られたものを貴賓列車に改造された客車や一、二号蒸気機関車

モサラベとムデハル

酢屋 潔

何所の国でも固有の文化というものをもっているものである。そして或る国を征服したり、されたりした時はどうなるか。

征服した場合は大体被征服地の既存の文化を破壊し自分達の文化を発展させるのが普通である。

これから述べようとする文化はスペインにおける特異な文化でピレネー以西はヨーロッパでない、と人をしていわしむる所以である。

スペインは西暦710年にイスラムがイベリア半島に侵入し、またたく間に大部分を占領してしまった。しかし、統治するに彼等は寛大な方法をとった。これがモサラベである。キリスト教徒はイスラム世界における公認された異教徒として扱われ人頭税を払えば定住することを許された。その様な統治形態の中で文化の融合が構成されていった。

これを建築を例にとると興味があるような気がする。例を有名なアルハンブラに取ると先ず日本とは全く異質な建築に驚かされる。外から見ると古ぼけた煉瓦のはげ落ちた塔や建物が小高い丘になんの変哲もなく建っている。私は何ういう風の吹きまわしかこの宮殿に三回も行っているので内部の様子は大体頭に入っている。アルハンブラとはアラビア語の「赤い城」からきているそうで、その赤い様子を見るため、その向かいの教会までタクシーを走らせたことがある。多勢の人が夕日の落ちるまで眺めていたがとうとう赤くはならなかった。赤くなるのは何時なのだろうか。

さて、それはさておき、この城に入るには「さばきの門」をくぐらなければならぬ。煉瓦を積みあげた頑丈な門で美的な面より防衛の目的で建てられたものだろう。門の上に人間の手形が彫ってありコーランの五戒を意味しているという。門を抜けるとメファールの間（謁見の間）とういところに出る。この部屋はアルハンブラでも最も古い方に属し昔の面影が残っているという。はじめ法廷として使われていたが後私的な謁見室として使われた模様である。ただし十六世紀以降は礼拝堂の役割を果たした。この部屋で驚く壁面の装飾だろう。幾何学的文様をはじめとして組み紐文様及びアラビア文字文様で壁面は覆われている。この文様はこの部屋にかぎらずアルハンブラの各部屋に用いられている。線をたどったりすれば目がくらむもので面全体として見た方が良く。それにしても人をして不思議な感覚におち入らせる。これらの文様は皆石膏の平面に描かれたものである。

この部屋をあとにし小さな部屋を通過してすばらしい明るいところに出る。ここがコマレスのパチオ（中庭）と呼ばれているところでこの城の見所の一つになっている。南北に長い長方形のパチオで大きなプールのような水槽が目につく。その両側にミルトという生垣のような植物を植えている。そして北側にはコマレスという塔がそびえて水面に影をおとしてアクセントを造っている。北側は五連のアーチがその上に七連のアーチを頂きすばらしい簡素の美を支えている。

このパチオから小さな部屋を通過してライオンのパチオに出る。このパチオはコマレスと違って南北よりも東西に長い。十字の水路により四つの区画に分けられ中央に十二頭のライオン像で取りかこまれた泉水盤を据えている。アッシリアから移されたと伝えられる黒大理石造りのライオン像は顔面が一般のライオン像と異なり一種独特の貌をしている。ライオンの口から水が流れているか時間がくればその位置のライオンの口から勢いよく水が噴出するというが之は後世造ったものだろう。このパチオは全く王家の私的住処であってアルハンブラにあっても最も華やかで優婉である。周辺の回廊を支える百二十四本の白大理石の列柱は清楚乍ら甘美な感情をもよおさせ、椰子の樹立のイメージだそうだ。そしてその上部、さらにその上の厚い軒蛇腹の部分を隈なく蔽っている美しい漆喰装飾は椰子の樹の大きな葉になぞらえている。これは案に砂漠の中のアアシスをイメージしたもので逸楽の園である。アルハンブラ全体としていえることはふんだんに何の部屋も水を使っていることで、これはシエラネバダ山脈から引いたもので大いに活用されている。

この他にも「諸王の間」とか「二姉妹の間」などあるが長くなるのでやめておく。専門家達はモサラベの特徴をむずかしい理論で表現しているが要するにイスラム統治下の中で彼等の技術を習得した造形技術なので極めてイスラム的なことはいなめないだろう。しかしその中でも柱廊とか平面の馬蹄形使用で特色を見出した。

ムデハルはレコンキスタ（国土回復運動）でイベリア半島からイスラムを駆逐してそのあとに残ったイスラム教徒で色んな建築に名を残した。

セビリヤのヒラルダの塔は四角な煉瓦の塔で高さは七十米にも及ぶ。その上にゴシック風の建物が十六世紀に増築されている。今迄敵であった建物をこわすことなく平然と付け足して自分たちの建物にしたこの精神状態こそムデハルであろう。この塔は渾然としてこの都市に溶合してシンボルとして名を高めている。単に建物をつぎ足しただけなのに文化的には融合が行われてこの町に融け込んでいるんだろう。この他色々特色ある建築もあるようだがやはり宗教など精神文化でより特色を発揮しているようだ。